

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	新田 篤
論文題目	日本近代文学におけるフロイト精神分析の受容		
(論文内容の要旨)			
本論文は、フロイトの精神分析が、近代日本文学においてどのように受け入れられて、文学の方法論となっていたかを、何人かの作家の例を参照しながら跡づけ、日本の近代思想と西欧の思想との間の相互関係の中で、フロイトの思想が果たした役割を解明しようとしたものである。 序章においては、明治から昭和にかけてフロイト思想が医学、心理学、文学の分野でどのように紹介され概説されていたかということに関する歴史的叙述がなされる。とりわけ芥川龍之介や伊藤整など、影響力の大きかった作家におけるフロイト思想の扱いを調べるとともに、精神分析それ自身の日本的発展の事情を確認することによって、以下の各章における考察の枠が整えられる。 第一章では、森鷗外におけるフロイトの影響が論じられる。ことに、鷗外が実際に所持していたフロイトの著作に直接当たって考証するとともに、日本におけるフロイトへの最初の言及が森鷗外によるものであるということを明確化している。すなわち森鷗外はフロイトの初期の神経症論を同時代的に知り、医学的検討の対象としていたのであり、その結果鷗外はフロイトの性病因論に対して否定的であった。ところが鷗外はまた、その文学作品において性病因論を取り上げて登場人物の口から語らせており、文学的にもフロイトに関して必ずしも無関心ではなかったことが推測される。 第二章では、夏目漱石の弟子であった中村古峯の小説「殻」が取り上げられる。この作品において、古峯は自然主義文学の影響のもとに、実弟の統合失調症の症状を克明に描写しており、そこには西欧の近代精神医学における記述現象学との間の類比関係が認められる。やがて彼は精神分析に影響を受けて、様々な精神の病を描写し、とくに雑誌『変態心理』を発刊して人間の心理を文学的に解明しようとするが、後に精神医学者となる。この章では、身内に患者を抱えた一人の人間が、文学と医学の両面から精神の病理に接近しようとして苦闘し、その過程でフロイトの精神分析を吸収した様子が描かれ、フロイトの精神分析は医学との関係において方法論的に受容されていることが示される。 第三章では、やはり漱石の弟子である内田百閒が取り上げられる。この作家は父への愛着関係において解決できない悩みを抱えていて、それがいわゆる「創造の病」としての神経衰弱として現れていたと考えられる。彼はそのような個人的な問題意識のもとに、間接的に精神分析からの影響を受けたと考えられ、夢の扱いや作品そのものを夢のようなものとして構成しているところに、その影響が現れているとみられる。ここでは精神分析の考え方を必ずしも医学的には捉えずに、人間の意識のありようの記述様式として用いるという方法がみられる。 第四章では、佐藤春夫の「更生記」を扱う。佐藤のこの小説は、はっきりと精神分析を表に出して装置として用いている。これは精神分析を題材とした日本で最初の長編小説であると言える。この小説において佐藤は、精神分析に反対の立場をとる一般の精神医学の立場と、フロイトの心的外傷論の立場とを組み合わせしており、両方の知識を使用した実験的な小説であるという点で、第一章で論じた森鷗外の論からの連続性があり、また精神分析的な病因論を一種の推理小説のように組み立てるという点では、三島由紀夫の小説にも通じるところが窺える。			

第五章では中上健次の文学を扱う。中上自身は、フロイトのエディプスコンプレクスを物語の定型の一つとしていた。これは、上記における、精神医学の枠内もしくは精神医学の隣接科学として精神分析を捉えるということからも、また精神分析とは無意識を扱う学であるということからも少し外れて、無意識を独立の構造的領域として文化的にも広く扱うという態度である。中上は、物語の祖型がそこにあると考えることで、エディプスとは別の祖型として「母と子の終わりのない愛憎の葛藤」という図式を見出し、それをもって、小説がエディプスコンプレクスを「超える」という可能性を主張するに至った。

終章では、日本の近代文学における、フロイトの思想の受容の様々な様態を振り返っている。ここでは再び、これまでに論じられた作家が取り上げられて相互に比較されている。そして時代を追って、これらの作家によるフロイト受容のあり方の特徴を吟味している。すなわち、治療法としての精神分析に期待をかけつつそれを小説の筋書きとして用いるという初期の方法から、「識域下の我」と芥川が言うような、「通常の方法では描き出せない次元」への接近の方法として精神分析を暗に用いるという方式へと変わり、さらにそれは、一見したところでは分からない広範囲の「物語の定型」を探る方法として、精神分析の所見を使うという方法へと移ってきたと見られる。

(論文審査の結果の要旨)

日本における精神分析の発展の研究は、しばしば精神医学者によってなされ、ともすれば精神医学と心理学という職業的視点からのものに偏り、人間精神の危機、異常、崩壊といった側面にかかわる文学的関心に答えようとする多角的なものには、なかなか得なかったという全般的な印象が存在している。

本論文「日本近代文学におけるフロイト精神分析の受容」は、日本におけるそのような学問的状况を踏まえて、文学に立脚しながら精神分析によって日本近代の人間認識がどのように変化したかを跡づけようとするものである。

本論文では、まずフロイトの医学的所説が、いつ誰によって初めて日本で論じられるようになったかということについて、第一章で実証的研究を行っている。森鷗外の所持していたフロイトの本を資料とした調査結果に基づき、鷗外が日本では最も早くフロイトに言及したということを明確にしている点で、これはたいへん優れた業績であると言える。森鷗外における医師としての側面と文学者としての側面は、一人の中で切り離し得ないものであり、医学の理論として鷗外がフロイトについて批判的に論じているとしても、小説の中で登場人物に類似の理論を語らせているのは、鷗外が人間認識としての精神分析を検討する必要があるということを理解していたためであると思われ、鷗外の文学を理解するうえでもこの業績は有益である。

第二章以下では、精神分析を取り巻いてそれを自らの文学的活動のうちに取り入れた何人かの作家が語られている。中村古峯は、実人生において、弟の精神疾患という現実を抱えていた。この問題は彼の人生を大きく規定しているが、彼はその病の影響力を解明することによってそこから脱しようとし、そのために用いたのが精神分析という方法であった。ただし古峯は、実際に精神分析を医療的に用いるのではなく、精神分析という認識の方法を用いて、文学作品を書くことによって、問題を克服しようとしたのであった。そのために多くの人々と協力関係を結んで雑誌『変態心理』を発刊してかなり長くそれを維持したが、彼は結局のところ自ら精神科医となったのである。

中村古峯が自らの生活にまで食い込んだ問題に取り組みながら精神分析を取り入れたのとは比べると、それ以降のフロイト精神分析の受容の仕方は、より洗練されたものとなっている。本論文で取り上げられている内田百閒は、自らの心の中に潜む亡き父親との関係をどのように処理してよいか分からずに文学創造にその場を求めている。百閒の近くには芥川龍之介がおり、この時代にはすでに精神分析の人間認識はかなり広く知られるところとなっていたが、百閒はそうした状況を活用して、夢のような作品として自らの無意識を描き出すことができ、いわゆる「創造の病」からの出口を見出したのである。すなわち、意識と無意識との対立関係という理論的な構造の形成は、巧みに短編作品の構造の中に生かすことができたのである。

このような方向性は、伊藤整による「意識の流れ」という考え方とそれによる作品創造という方法論へとつながっていると思われ、本論文ではそのことを的確に指摘している。ただしこの新心理主義の「意識の流れ」の考え方自体が、フロイトから逸れていく方向を含んでいるため、そこに深入りすることは本論文ではなされていない。

フロイトの精神分析がさらに社会的に浸透した昭和の時代になると、作家は精神分析を用いて人間の苦悩の複雑な構造を描き出すことを試みることができるようになり、その試みは佐藤春夫の「更生記」に見出すことができる。ここでは一般の精神医学と精神分析の理論が組み合わせられており、症状記載にはクレペリンを、病の理解には精神分析を用いるという構成がとられている。本論文では、その典拠となった文

献について資料的な考証を行って、精神医学においてはクレペリンがすでに訳され、また精神分析においてはフロイトの翻訳のシリーズが昭和の初期に一応の完結を見ていることから、佐藤春夫がいち早くその両者を実験的に文学作品の中で一つの間人心理として用いるに至ったことが明らかにされている。臨床の知見の流通がかなり信頼できる形で行われるようになったことで、文学作品もそれに基づいて組み立てやすくなっており、この方向での試みは、後の三島由紀夫にも反響しているものであることが理解される。

しかしこのようなフロイト精神分析の活用の流れは、戦争により一時途絶えたように思われ、明示的なその活用は行われにくくなったと考えられる。それに対して再び精神分析の知見を活かして文学の深化を図るためには時間が必要であったと思われるが、戦後の文学の中で特筆されるのが中上健次である。彼は自らの作品を執筆してゆく中で、「物語の定型」としてのエディプスコンプレクスという考え方に会っており、この考え方は、フロイトの無意識を、個人的な意識との関係のみならず、歴史や共同体との関係において認識するということを意味していた。彼はそれにより性や暴力をその「定型」から理解して書き進める方法を見出したのであるが、そのことを梃子にして、さらに自分に馴染むと考えられる、エディプスを超えるアジア的「定型」を見出したと信じた。このような文学的姿勢は、どこまで世間に広められたり定着されたりしたかはさておき、精神分析が文学の創作作法において活用された例として顕著なものであり、また文化の伝統についての議論にも寄与するものであった。

このように本論文は、日本文学において浮きつ沈みつしながら認められるフロイト精神分析の思潮を的確に分析することによって、近代日本文学の間人観の特徴の一つを取り出すことに成功しており、人間の共生の論理を目指して創設された共生人間学専攻人間社会論講座の理念に適ったものであり、価値あるものと認める。また、平成25年2月20日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降